

付録目次

同義語集	671
中国医薬学史年表	691
五行分類表	706
中薬一覽表	707
方劑一覽表	727
度量衡換算表	751
十二經脈図	755
奇經八脈図	767
身体図	775

同義語集

同義語とは、語形が違っていても意義がほぼ同一である一群の語を指す。例えば、「疏風散寒」「疏散風寒」「疏風祛寒」という3つの語は、すべて同義語である。

中医学では、同義語が非常に広く使用されている。これは中国語の文法や文章の創作方法と、深い関係がある。中国語の文章では、同じ言葉を何度も繰り返し使うことを避ける傾向がある。繰り返し同じ言葉の出てくる文章は、冗漫なイメージを読者に与え、全体に締まりがなくなるからである。そこで、同義語や類義語を使用して、同じ言葉が重複しないように工夫する。そうすることにより、文章上の用字は豊富になり、生き生きとした流れのある文章となる。

しかし、はじめて中医学を学ぶ外国人にとっては、このような多様な語形の使用は非常にやっかいな問題となるだろう。ある1つの中医用語を覚えたとしても、語形が違う同義語が頻出したのでは混乱してしまう。そこで、その問題を少しでも解消できるよう、この「同義語集」（一部類義語を含む）を本辞典の付録として作成した。ぜひ読者諸氏の参考にしていただきたい。

ここに収載した同義語は、中医学で常用される専門用語である。この同義語集では、用語を「病因」「病機」「治則・治法」「症状」ごとに分け、それぞれ使用される頻度にもとづいてマークを付している。最もよく用いられるものは(A)、比較的よく用いられるものは(B)、それほど用いられることがないものは(C)で示してある。

同義語一覧表

1. 病因		
[あ]	畏寒肢冷 (A)	形寒肢冷 (B)
	遺精滑泄 (A)	遺尿滑精 (B)
	飲食停滯 (A)	飲食積滯 (B)
	飲食不節 (A)	飢飽失常 (B), 暴飲暴食 (B), 飲食失節 (B)
	溫熱毒邪 (A)	溫毒邪氣 (B), 溫毒之邪 (C)

[か]	外感邪気 (A)	外邪侵襲 (A), 感受外邪 (B)
	火邪 (A)	邪火 (B), 火熱之邪 (B)
	火性炎上 (A)	火性上炎 (B)
	火毒之邪 (A)	熱毒之邪 (A), 火熱毒邪 (B)
	過度安逸 (A)	過度安閑 (C)
	過勞 (A)	過度疲労 (B), 過度勞累 (B), 勞力過度 (C)
	頑痰 (A)	老痰 (B)
	下利清穀 (A)	下利清水 (B), 自利清水 (C)
	項背強直 (A)	項背強急 (B)
	膏粱厚味 (A)	炙燂煎焙 (B)
[さ]	七情内傷 (A)	情志刺激 (B), 七情所傷 (B)
	湿濁 (A)	穢濁 (B), 汚濁 (C)
	邪 (A)	邪氣 (A), 病邪 (B), 賊風 (C)
	邪氣壅聚 (A)	邪結不散 (B), 邪聚不散 (B)
	手指顫抖 (A)	手指顫動 (B)
	情懷不暢 (B)	精神抑鬱 (A), 精神鬱悶 (B), 悶悶不樂 (C)
	情志不調 (A)	情志不暢 (A), 情志不和 (C)
	傷食 (A)	食傷 (B)
	小便涓滴不通 (A)	小便点滴不爽 (B), 小便排出不暢 (C)
	小便正常 (A)	小便調 (B), 小便自調 (C)
	小便清長 (A)	小便清冷 (B), 尿清量多 (C)
	小便短小 (A)	小便量少 (B)
	小便短赤 (A)	小便洪赤 (B), 小便不暢 (C)
	小便不利 (A)	癃閉不通 (B), 尿閉不通 (C)
	小便淋瀝不暢 (A)	小便淋瀝不宣 (C)
	小便淋瀝不已 (A)	小便滴瀝不尽 (B)
	思慮過度 (A)	勞神過度 (B), 憂愁思慮 (B), 過度憂思 (B)
	素体 (A)	平素身体 (B), 身体原本 (B), 平時身体 (B)

中国医薬学史年表

旧石器時代	約170万～69万年前	旧石器時代，原始人はすでに手製の石器を作っていた。約170万年前の「元謀人」（雲南），約80万年前～65万年前の「藍田人」（陝西），約69万年前の「北京人」（北京）の遺跡には火を用いていた痕跡が認められる。
	約20万～5万年前	この頃，燧人氏の「燧を鑽ちて火を取り，以って腥臊を化す」との伝説にあるように人類は人工的に火をおこすことを覚え，温罨法や灸法が生み出された。
	約1万8000年前	山頂洞人（北京），骨鍼を製作。骨鍼は縫製だけでなく破癰・排膿・瀉血に用いられた。
新石器時代（夏）	約1万年前～ 西暦紀元前2100年頃	新石器時代に入り，精巧な石器が製作されるようになり，それにあわせ最も古い医療道具である「砭石」が作られた。「神農，百草を嘗む」の伝説はこの頃のもの。
	紀元前2100～ 前1700年頃	夏代，酒は百薬の長として，すでに醸造が行われた。「昔者帝女儀狄をして酒を作らしめて美し，これを禹にすすむ」（『戦国策』）
商（殷）	紀元前1700～ 前1100年頃	商代，疾病という名称出現。灸・鍼・按摩術・薬物を用いた治療が行われるようになる。酒剤と湯剤が作られ，湯剤の創製は方剤の誕生を意味する。地下水道出現。
西周	紀元前1100頃～前771年	周代，医事管理制度・審査制度および医学の分科が整い専業の医師出現。多くの疾病が認識されるようになり，100種余りの薬物が使用されるようになる。『周礼』によれば疾病の診断に望診・問診・脈診が行われ，疾病治療に食物療法・薬物療法・手術が行われた。
東周	紀元前770～前476年	春秋時代，医学は巫術から離脱し，独立した科学としての体裁を整える。医爰・医和などの著名な医家が出現。医和が六氣致病説（病因学説の萌芽）を説く。『黄帝内経』成る。『行氣玉佩銘』出現。扁鵲，齊・趙・鄭・秦の諸国を遍歴し医療を行なう。
	紀元前475～前168年（戦国時代） 紀元前475～前168年（戦国～漢・文帝12年）	『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』『却穀食気』『導引図』『養生方』『雜療方』『胎産書』『十問』『合陰陽方』『雜禁方』『天下至道談』および『脈書』『引書』（発掘された帛書には表

中薬一覧表

	生薬名	効能	性味	帰経
あ	阿膠(あきょう)	補血止血・滋陰潤肺	甘・平	肺・肝・腎
	鴉胆子(あたんし)	清熱解毒・截瘡治痢・腐蝕贅疣	苦・寒	大腸・肝
い	硫黄(いおう)	殺虫止痒・壯陽通便	酸・温, 有毒	腎・大腸
	郁李仁(いくりにん)	潤腸通便・利水消腫	辛・苦・平	大腸・小腸
	飴糖(いとう)	補脾益氣・緩急止痛・潤肺止咳	甘・温	脾・胃・肺
	威靈仙(いれいせん)	祛風湿・通経絡・止痹痛・治骨鯁	辛・鹹・温	膀胱
	茵陳蒿(いんちんこう)	清利湿熱・退黄疸	苦・微寒	脾・胃・肝・胆
	淫羊藿(いんようかく)	補腎壯陽・祛風除湿	辛・甘・温	肝・腎
う	鬱金(うこん)	活血止痛・行氣解鬱・涼血清心・利胆退黄	辛・苦・寒	心・肝・胆
	烏豆(うず)	祛風湿・散寒止痛	辛・苦・温, 有大毒	心・肝・脾
	烏賊骨(うぞくこつ)	収斂止血・固精止帶・制酸止痛・収湿斂瘡	鹹・渋・微温	肝・腎
	烏梅(うばい)	斂肺・渋腸・生津・安蛔	酸・平	肝・脾・肺・大腸
	烏薬(うやく)	行氣止痛・温腎散寒	辛・温	肺・脾・腎・膀胱
	禹余糧(うよりょう)	渋腸止瀉・収斂止血	甘・渋・平	胃・大腸
	益智仁(えきちんにん)	温脾・開胃節唾・暖腎・固精縮尿	辛・温	脾・腎
	延胡索(えんごさく)	活血・行氣・止痛	辛・苦・温	心・肝・脾
え	鉛丹(えんたん)	解毒止痒・収斂生肌・截瘡	辛・微寒, 有毒	心・肝
お	黄耆(おうぎ)	補氣昇陽・益衛固表・托毒生肌・利水消腫	甘・微温	脾・肺

方剂一覧表

	方剂名	出典	処方構成	効能
あ	阿膠鶏子黄湯 (あきょうけいしおうとう)	通俗傷寒論	石決明・生地黄・生牡蛎・茯神木・生白芍・絡石藤・阿膠・鈎藤・甘草・鶏子黄	滋陰養血・柔肝熄風
	安宮牛黄丸 (あんぐうごおうがん)	温病条弁	牛黄・鬱金・犀角・黄芩・黄连・山梔子・雄黄・朱砂・竜腦・麝香・真珠・金箔衣	清熱開竅・豁痰解毒
い	易黄湯 (いおうとう)	傳青主女科	山藥・芡実・黄柏・車前子・白果	健脾燥湿・清熱止帶
	葶苈湯 (いけいとう)	備急千金要方	薏苡仁・冬瓜子・桃仁・芦根	清肺化痰・逐瘀排膿
	異功散 (いこうさん)	小兒藥証直訣	人參・白朮・茯苓・陳皮・甘草	健脾・益氣・和胃
	一貫煎 (いっかんせん)	柳州医話	沙参・麦門冬・当帰・生地黄・枸杞子・川楝子	滋陰疏肝
	胃苓湯 (いれいとう)	丹溪心法	蒼朮・陳皮・厚朴・猪苓・白朮・茯苓・沢瀉・大棗・甘草・生姜・桂枝	祛湿和胃
	茵陳蒿湯 (いんちんこうとう)	傷寒論	茵陳蒿・山梔子・大黄	清熱・利湿・退黄
	茵陳五苓散 (いんちんごれいさん)	金匱要略	沢瀉・茵陳蒿・猪苓・白朮・茯苓・桂枝	利湿退黄
	茵陳四逆湯 (いんちんしぎゃくとう)	張氏医通	甘草・茵陳蒿・乾姜・附子	温裏助陽・利湿退黄
う	右帰飲 (うきいん)	景岳全書	熟地黄・山藥・枸杞子・杜仲・山茱萸・肉桂・甘草・附子	温腎填精
	右帰丸 (うきがん)	景岳全書	地黄・山藥・山茱萸・枸杞子・鹿角膠・菟絲子・杜仲・当帰・肉桂・附子	温補腎陽・填精補血
	烏梅丸 (うばいがん)	傷寒論	黄连・乾姜・烏梅・細辛・附子・桂枝・人參・黄柏・蜀椒・当帰・煉蜜	温臟安蛔

十二經脈圖 (圖 1 ~ 12)

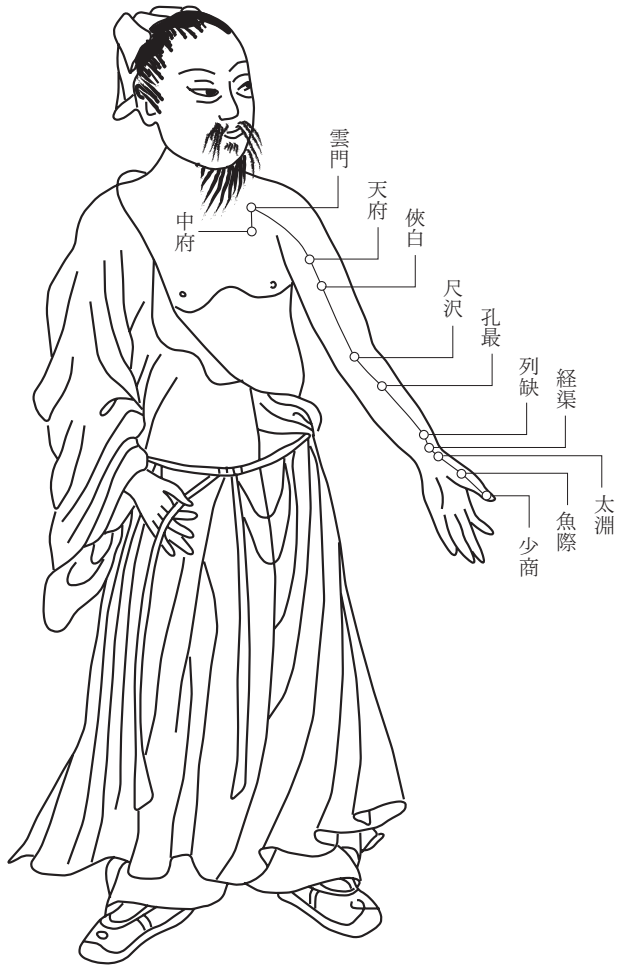


圖 1 手太陰肺經